なんだろう？

暗い夜の海でも漁師さんはこれを使ってがんばるんだよ。



西ノ島町歴史民俗資料館など

漁撈(海)

カンテラ

解説

夜の海で、光に集ってくるという魚の習性を利用して魚を取る漁法で使われたのがこのカンテラです。昔くは舟の上でたいまつを燃やしていましたが、石油ランプが発明されると、それを漁業にも利用し、カンテラとして使いました。現在は、船のエンジンで電気を起こし、それを集魚灯(しゅうぎょとう)として使っています。1つの船の集魚灯でも、野球場のナイターのような明るさになります。

うつりかわり

現在の姿

たいまつからカンテラ、カンテラから電気の集魚灯と変ってきました。最近では、最先端の発光ダイオードを活用する研究も進められているそうです。

夜の漁業の照明具



使われた年代 明治～昭和

使用した人々 漁民





とくちょう

魚の習性をうまく利用して、夜間にも漁が行なえます

なんだろう？

何のための明かりかな？今でも見ることができるよ。



漁撈(海)

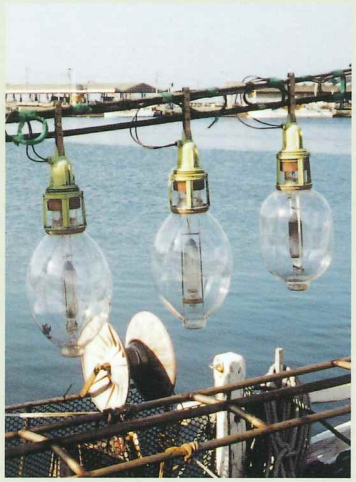
浜田市浜田郷土資料館・隠岐郷土館・
絲原記念館など

集魚灯（しゅうぎょとう）

解説

昔の漁業、特に夜間の漁撈活動では、魚群を集めるための照明は、現在のような発電装置やバッテリーによる非常に明るいものではなく、薄暗く、雨風に弱いもの（ローソク、松明（たいまつ）など）でした。時代の流れとともに工夫、改良され、昭和初期にはカーバイトを燃料とするランプとガスタンクが対（つい）となったものとなり、そして現在の電灯（でんとう）へと変化していきます（写真は、昭和初期の集魚灯）。

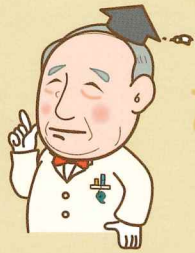
うつりかわり



現在の姿

現在使用されている集魚灯は、イカ釣船に代表されるように、発電装置を船内に装備し、軽量で非常に明るい電球を多く使用して大量漁獲の一役を担（にな）っています。写真は、浜田漁港に停泊中のイカ釣船にみられる集魚灯です。

魚を集めるための道具



使われた年代　1926～1946年頃

使用した人々　漁業で生計をたてる人（漁師）



とくちょう

昭和の初期、船上で魚を集めるための明かりとして、カーバイトを燃料とするガス灯が使われていました。

なんだろう？

口は小さく底は広いね。フタも付いているけど何だろう。



日原町歴史民俗資料館・飯南町民俗資料館など

漁撈

うなぎかご

解説

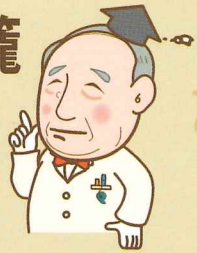
うなぎは鮮度が大事なので、釣ったうなぎはうなぎカゴに入れ、生かして持ち帰りました。うなぎかごは、肩を平たく横に張り出してカゴ底を広くし、中で重なりを防ぐ形になっています。うなぎには、逆立ちをして逃げ出す習性があり、このような形にすることで、逃げ出しも防げました。さらに、うなぎかごの口には、エサカゴをはめ、その上からフタカゴをして結び、厳重な口仕舞となっています。このかごは、うなぎの持運びだけでなく、カゴを水に浸けてイケスにも使われました。

うつりかわり

現在の姿

使われ始めたのは、江戸時代と思われます。近年までうなぎ釣りの人が持ち歩いているのが見かけられています。現在のうなぎかごは、大型のプラスチック製で、モジなどで捕ったうなぎを竹製のカゴに入れて、生かしているのが見かけられます。

うなぎを捕獲した時に一時保管する籠



使われた年代 ～1980年代頃まで

使用した人々 うなぎ釣りの人



とくちょう

うなぎが逃げ出さないように口がせまく作られています。

なんだろう？

この道具で色々な獲物をゲット！突いたり引っかけたりと大活躍。どんな場所で使われているのかな。



隠岐郷土館など

漁撈(海)

やす

解説

隠岐は豊かな海の資源に恵まれた島です。漁民は、かんこと呼ばれる小型の和舟(わぶね)で海に乗り出し、サザエ、アワビ、和布(わかめ)、魚などを収穫しました(隠岐では、かなぎ漁と言っています)。この4つのヤスは、かなぎ漁で使われている代表的なもので、舟の上から箱メガネで海中の獲物を見つけ、このヤスで突いたり、引っかけたりして漁をしました。三又(みつまた)のものは、魚、サザエ用、カギ型はアワビ用で、竹で作られた柄(え)も含め全体の長さは7m以上にもなります。

うつりかわり

現在の姿

舟が木製からプラスチック製のものに変ったりしていますが、ヤスは鉄でできており、変化はありません。なかには、さびにくいステンレス製のものを使っている人もいますが、漁師さんは、「鉄製のものが使い易(やす)い。」と話していました。

魚、サザエ、アワビなどを獲る道具



使われた年代 ～現在

使用した人々 漁民



とくちょう

海の獲物をこれでゲットします。

なんだろう？

海底の岩場で1m以上も成長するものを、この長い柄の先に付いている鎌で引っかけて採るんだよ。





隠岐郷土館など

和布鎌（わかめがま）

解説

3月から5月にかけて、和布漁（わかめりょう）が最盛期となります。海底の岩場に生えている和布を刈り取るときに使うのが、この和布鎌です。1m以上にも成長した和布の根元をこの鎌で刈り、それを引っかけ舟に引っぱり上げます。舟一杯になれば港に帰り、干（ほ）し和布、塩和布、板和布などを作ります。この時期、隠岐の漁村では、あちらこちらに和布を干す風景が見られます。

うつりかわり

現在の姿

最近では、養殖による和布漁も行なわれるようになりましたが、かなぎ漁で行なわれる和布漁では、昔も今もこの和布鎌は欠かせません。

和布を刈り取る専用の鎌



使われた年代：～現在

使用した人々：漁民



とくちょう：深い海底にはえる和布をとるために、長い柄の先に鎌が付いています。

なんだろう？

真ん中にある石のおもりを使って海の上からあるものを捕まえるために使っているよ。



漁撈(海)

隠岐郷土館・海士町歴史民俗資料館など

海鼠落とし

解説

水深が10m以上の割と深い場所にいるナマコを取るときに、この道具が使われました。5～12本のモリの根元に石の錘を付け重くし、海底のナマコの上に落として取る漁法です。深い場所での漁は、潮の流れや舟が風の影響を受けるため、熟練の技を要する漁法だといわれます。隠岐のナマコは歴史が古く、奈良時代にも都へ運ばれたと記録にあります。その時代には、どんな漁法でナマコを獲っていたのでしょうか。

うつりかわり

現在の姿

このナマコ落しのように、突き刺す道具ではナマコを傷つけてしまうことから、最近ではあまり使われなくなり、今頃では、ヤスの先に網を付け、その玉網(たも)ですくい取る方法が多いようです。

海鼠を捕る専用の道具



使われた年代 ～現在

使用した人々 漁民





とくちょう

石の錘で重くして、ねらいを定めます。

なんだろう？ えびで鯛（たい）、ごんがらで○○といわれるほど。形を変えて今もたくさんのファンが使っているよ。



隠岐郷土館など

漁撈(海)

おどりこ、えびがた、ごんがら

解説

江戸時代の終り頃から隠岐ではイカ漁が盛んとなりました。イカをスルメに加工し輸出品としました。そのイカ漁に使われたのが、これらの道具です。主に、ごんがらはスルメイカ、えびがた(えぎ)はアオリイカ、おどりこはケンザキイカに使われたということです。えびがたやおどりこを水中で動かし、小魚やエビが泳いでいるように見せ、エサとまちがえて飛び付いたイカを、先にある沢山の釣で引っかけて取りました。

うつりかわり

現在の姿

最近、ルアーフィッシングが流行(りゅうこう)していますが、このえびがたやおどりこは、日本のルアーのルーツと言えます。えびがたは桐(きり)の木や鳥の羽根で作られていましたが、最近はプラスチック製のものに変ってきました。

イカを釣るための疑似餌(ぎじえ)(ぎじえ)



使われた年代 ～現在

使用した人々 漁民



とくちょう

えびで鯛(たい)、ごんがらでイカといわれています。

なんだろう？

海底で動いている○○○をこれで一網打尽だ。



隠岐郷土館など

漁撈(海)

海鼠引き網

解説

内海や湾内の砂地にいるナマコをとるための網です。この網を海底に沈め、舟でゆっくりと引っ張り海底をさらい、網の中にナマコをすくい取る漁法です。弓形をした木枠に木綿製の網を取り付け弦の部分には鉄製の鎖や石の錘りをつけて海底をさらうのに適した作りとなっています。網も余裕をもたせた張り方をしており中に入ったナマコが出にくい作りとなっています。

うつりかわり

現在の姿

かなぎ漁をする漁師さんが高齢化し、最近ではあまり使われないようになりました。

海鼠漁専門の網

使われた年代 ～現在

使用した人々 漁民





とくちょう

海底にいるナマコをこれで一網打尽にします。

なんだろう？

底は針金で目の大きなカゴ状になっているんだ。だから余分（よぶん）なものは落ちるんだよ。



漁撈(淡水)

ジョレン

解説

①は昭和20年代のジョレンです。蜆を獲る部分は針金をカゴ状に組み合わせており、それに浮力のある杉材の柄を付けて、湖底の蜆を掻き上げました。②は昭和30年代のジョレンです。昭和30年代になると動力船が導入され、船を動かしながらの蜆掻きが行われるようになりました。船での操作性を考慮し、柄が杉材から竹に変わっています。

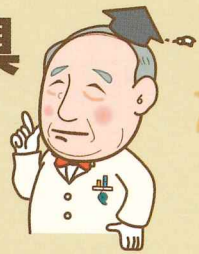
うつりかわり

現在の姿

柄は竹より軽いグラスファイバーに変わり、カゴも動力の強い船で掻いても壊れないように、溶接のしっかりしたものとなりました。カゴの網目を細くすると小さい蜆まで獲れることから、網目をやや幅広にしたりして、資源保護に努めています。

むかししまね資料館

宍道湖で蜆を獲るための道具



使われた年代：昭和20～30年代

使用した人々：蜆とりの人々



①



②

とくちょう

蜆を獲る道具で、カゴの網目を調節して小さい蜆をとらない工夫などしてあります。

なんだろう？

出し入れできるように蓋が付いているんだよ。



漁撈（淡水）

益田市立歴史民俗資料館など

鵜籠（うかご）

解説

鵜飼（うか）いには、鵜に手綱（たづな）をつけて、かがり火を川面（かわも）に照らし鮎（あゆ）を捕らせる舟鵜飼いがよく知られています。高津川の鵜飼いは、手綱を使わず、川岸より鵜を放し漁を行う放し鵜飼いです。川に鵜を自由に放し魚を捕らせ、獲物が喉（のど）にたまった時をみはからって、鵜を呼び戻し魚を吐き出させる漁法です。このかごは、竹を編んだものです。鵜を川漁（かわりょう）に連れて行く時に使います。また、鵜を捕獲する時にも捕まえた鵜を入れます。

うつりかわり

現在の姿

高津川の放し鵜飼いは、平成13年、益田最後の鵜匠塩田嘉助さんが亡くなり、絶滅しました。長良川（岐阜県）や岩国（山口県）で観光として鵜飼いを見ることはできますが、全国で唯一行われていた伝統漁法としての鵜飼いは、現在見ることはできません。

鵜の鳥を運ぶかご



使われた年代：2000年まで

使用した人々：鵜匠（故塩田嘉助）



とくちょう

軽くて強い竹で作った鵜の鳥を運ぶものです。

なんだろう？

形は丸ではなく、平たくて横長で、長いヒモも付いているよ。



日原町歴史民俗資料館・飯南町民俗資料館など

漁撈（淡水）

こしかご

解説

こしかごは竹製で、普通のカゴとは違って、縦に平たく横長です。この形は、釣や網漁やサグリのときに、カゴを腰に着けて両手を解放し、魚取りに専念できるように工夫された形です。また、カゴを平たくすることで、中の風通しを良くし、中の魚の重なりなども調節して、蒸れや腐りから魚をまもります。入り口は、シュロ皮で作った逆口という仕掛けで、屈んでも入れた魚が出ないようになっています。

うつりかわり

現在の姿

こしかごは、ほとんどの川漁に携行されましたが、特に川中での網漁では、腰に着けて両手を解放されることと、水切りの良いことで欠かせない道具で、現在も使用されています。

捕獲した魚を一時保管する籠

使われた年代：～現在

使用した人々：川魚をとる人





とくちょう

とった川魚をいれる道具です。

なんだろう？

細長い網だね。どうやって使ったのかな。



宍道蒐古館・浜田郷土資料館など

漁撈(淡水)

モンドリ

解説

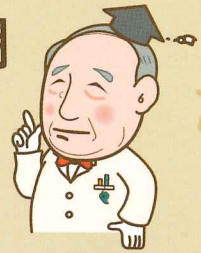
モンドリは、コイ、フナを獲る道具です。竹と網でできており、細長い筒状の網に一ヶ所のカエシがついています。モンドリの口に2本、先端に1本の竹柱がついており、それを湖底や川底につき立てて仕掛けます。湖に注ぐ河口の流れに仕掛けますが、主に斐伊川の河口で多く用いられました。

うつりかわり

現在の姿

これに変わるものは現在ありません。

斐伊川の河口付近でコイ・フナを獲る網



使われた年代 ～現在

使用した人々 漁師の人々



とくちょう

水中で泳いでいるコイやフナをとるために工夫されています。

なんだろう？ 木でできたサボテンのようだね。どんな使い方をしたのかな。



日原町歴史民俗資料館など

漁撈(淡水)

ほて

解説

川で捕ってきた魚を竹串(たけぐし)に刺し、イロリやカマドであぶり乾燥させます。適当な頃合をみて串ごと「ほて」に刺し、イロリの上や、軒端(のきばた)、天井裏などに吊(つる)して保存します。写真のほては竹製ですが、他に、麦藁(むぎわら)や稲藁(いなわら)でできたものもありました。

うつりかわり

現在の姿

近年は、流域の開発や汚染(おせん)などで川魚も減り、また、日常頻繁(ひんぱん)に海水魚を口にするようになると、川魚を捕って食べる人は少なくなりました。さらに、冷蔵庫の普及などもあって、ほてが吊してあるのを見ることはなくなりました。

魚を串に刺して乾かす用具



使われた年代 ～1950年代まで

使用した人々 漁師の人々



とくちょう

串にさしてほした川魚を串ごと突きさして吊すものです。

なんだろう？

製鉄に必要な材料をこれに入れて運んでいたんだよ。



たたら

こがねおいこ

解 説

たたら製鉄に使用される砂鉄の箱形をした運搬用具です。砂鉄の質の良し悪しが作り出される鉄鋼のできを左右しました。「粉鉄(こがね)7里に炭3里」という言葉が示すように良質の砂鉄を求め、運搬距離の遠近をいとわなかったことが知られます。砂鉄は中国山地の花崗岩の風化土である真砂土中から採取されます。砂鉄採取場から馬が通る比較的広い路(みち)までは専(もっぱ)らこの用具が活躍しました。砂鉄の運搬重量は約50キロです。

うつりかわり

現在の姿

手押車を利用するようになりました。

カンナ場からタタラ場まで砂鉄を背負って運ぶ道具



使われた年代：昭和8年～同20年まで

使用した人々：たたらに従事する人 女性の仕事



とくちょう

砂鉄を運ぶ運搬用具です。

むかししまね資料館

なんだろう？

炭を運んでいたんだよ。どんな場所で使っていたのかな。



たたら

すみとり

解説

すみとりは、たたら操業時、たたら炭を入れるための大型の箕（み）です。燃え盛る炉にたたら炭を入れるのは、2人の炭焚きの役割です。1回の操業（約70時間）にたたら炭は約13トンが使われます。30分ごとに2人の炭焚きがそれぞれ1杯10～15キロを、3杯ずつ、計6杯を入れます。

うつりかわり

現在の姿

たたら操業用具は現在も使用しています。

むかししまね資料館

タタラ製鉄操業時、炉に炭を導入する竹製の箕



使われた年代：江戸時代～現在まで

使用した人々：たたら場で炭焚きと称される人



とくちょう

たたら製鉄操業時に炉にたたら炭を装入する竹製の箕です。

なんだろう？

あるものを運ぶときに使っていたんだけど、そのあるものってなんだろう。



和鋼博物館など

たたら

川こがね取りすき

解 説

川砂鉄を取るためのすきです。斐伊川の中流域で主に使用されていました。川砂鉄のありそうな場所を、ジョレンで砂を川下にかき、瀬を作り、流れによって砂が流され、黒い砂鉄の層が出来ます。この層に川下よりこのすきを入れ、砂鉄と砂をすきの上で水の流れを利用して選別します。すきに残った砂鉄は、近くに止めた舟にうつし、溜まると川岸へ運び集積します。

うつりかわり

現在の姿

1980年ごろから川底が低下するので川砂鉄を取ることが禁止され姿を消しました。

むかししまね資料館

川砂に混ざっている砂鉄を取る道具



使われた年代 1980年頃まで

使用した人々 川砂鉄を取る人々



とくちょう

川こがねを取る道具です。


なんだろう？
下がこげているけど、火を使う場所で使っていたのかな。

たたら

すわりえぶり

解説

ケラ出しあるいはカマ出しは、動物でいう出産にあたります。操業開始から約70時間、たたら製鉄の成果物であるケラ（約2.5トンの鉄鋼塊）は、炉の解体によって灼熱（しゃくねつ）の姿を現します。ケラの上にまだ燃えきらないたたら炭が残っている場合など、柄（え）ぶりで炭をかき集めたりします。民具としてのエブリは農耕、製塩作業用が知られますが、それらと比較すると、柄が4メートル近い長さであるのは大きな特徴で、これは高温対策の結果です。

うつりかわり

現在の姿

たたら操業用具は現在も使用しています。

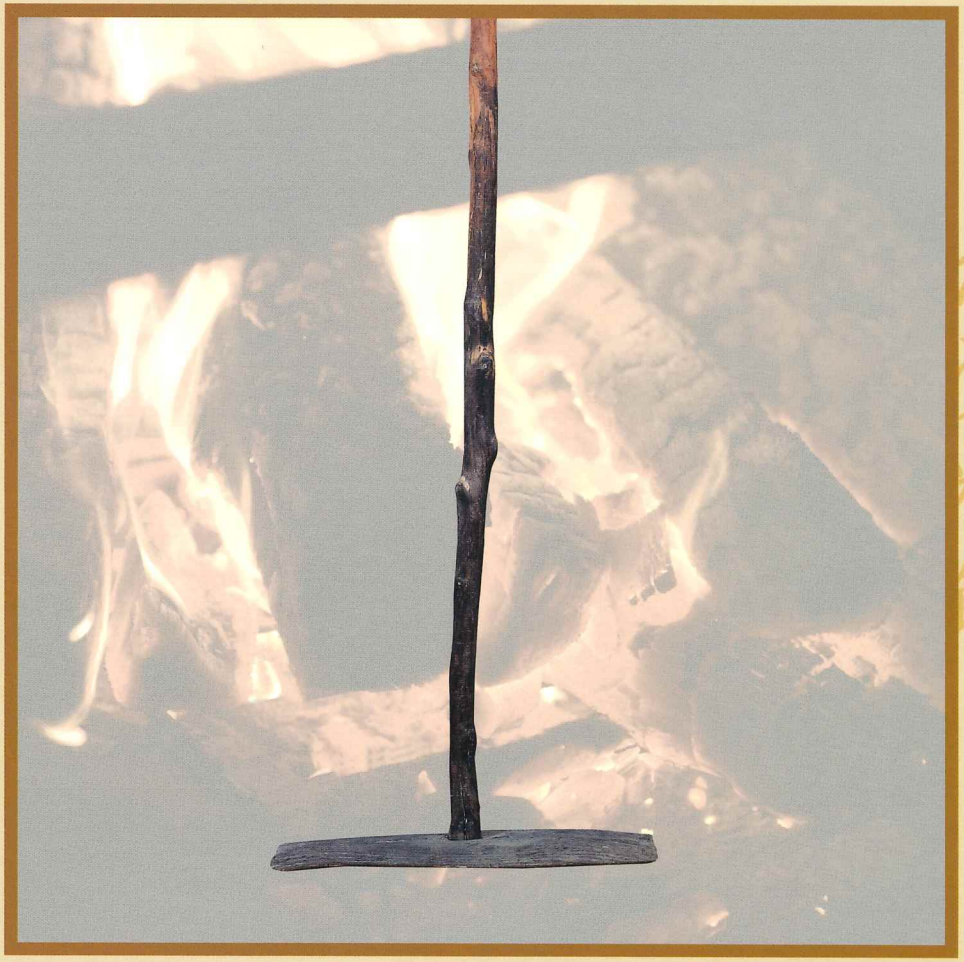
むかしまね資料館

ケラ出しのとき、ケラ上に残っている炭を集める用具



使われた年代　江戸時代～現在まで

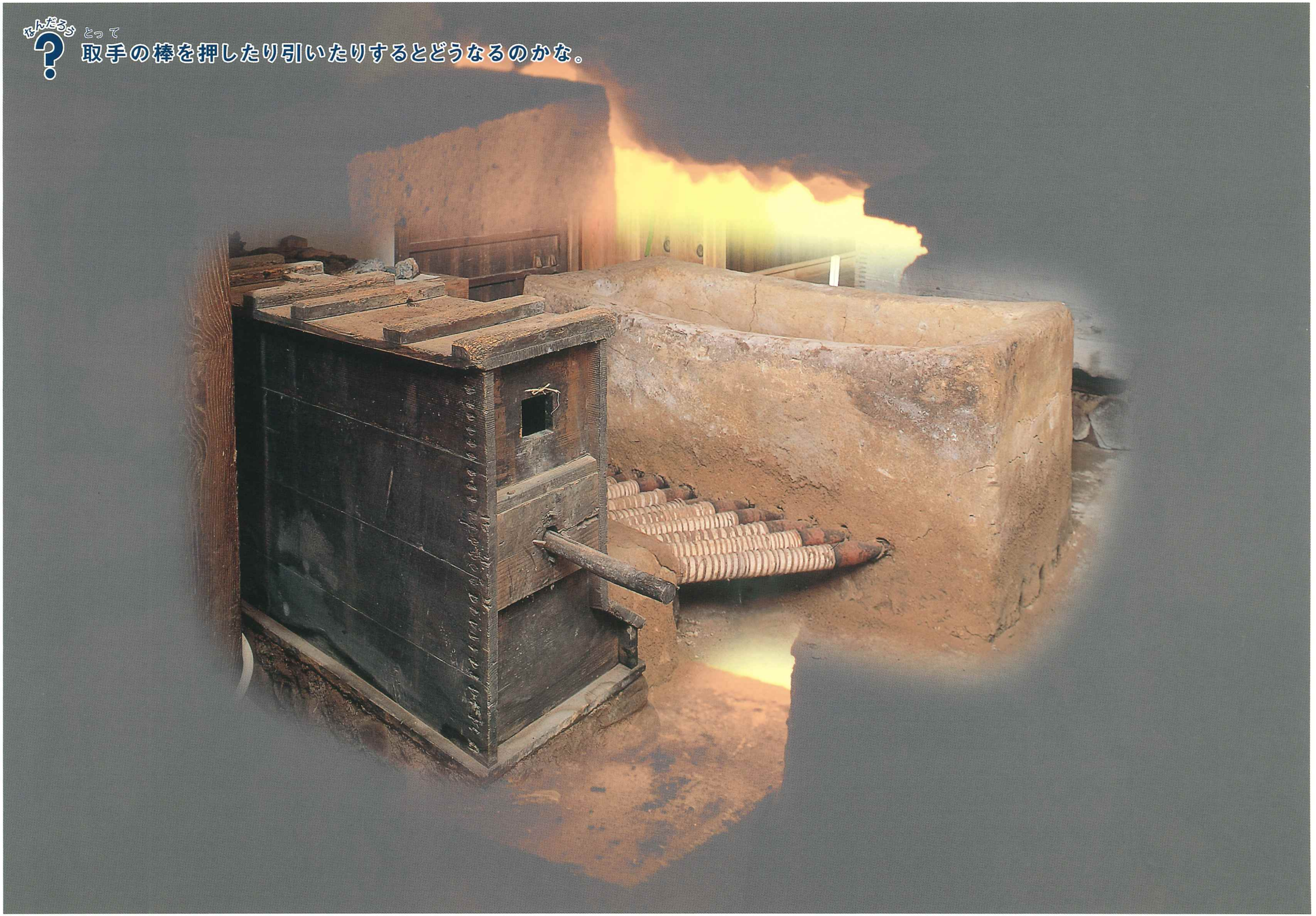
使用した人々　たたら製鉄にたずさわった人



とくちょう

ケラ出しの際、ケラ上の残存するたたら炭のかき集めなどに使用します。

なんだろう？ とって
取手の棒を押したり引いたりするとどうなるのかな。



浜田市金城民俗資料館など

たたら

二丁鞴（にちょうふいご）たたら

解説

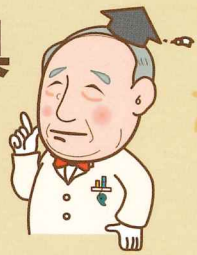
たたらは、「野たたら」から「吹子（ふきこ）たたら」、そしてこの「二丁鞴たたら」へと進化していきました。たたらの炉の両側に「ふいご」を備えることから「二丁鞴たたら」と呼ばれます。一台の「ふいご」から八本の気呂（きろ）で炉に風を送る「四丁鞴たたら」もありました。

うつりかわり

現在の姿

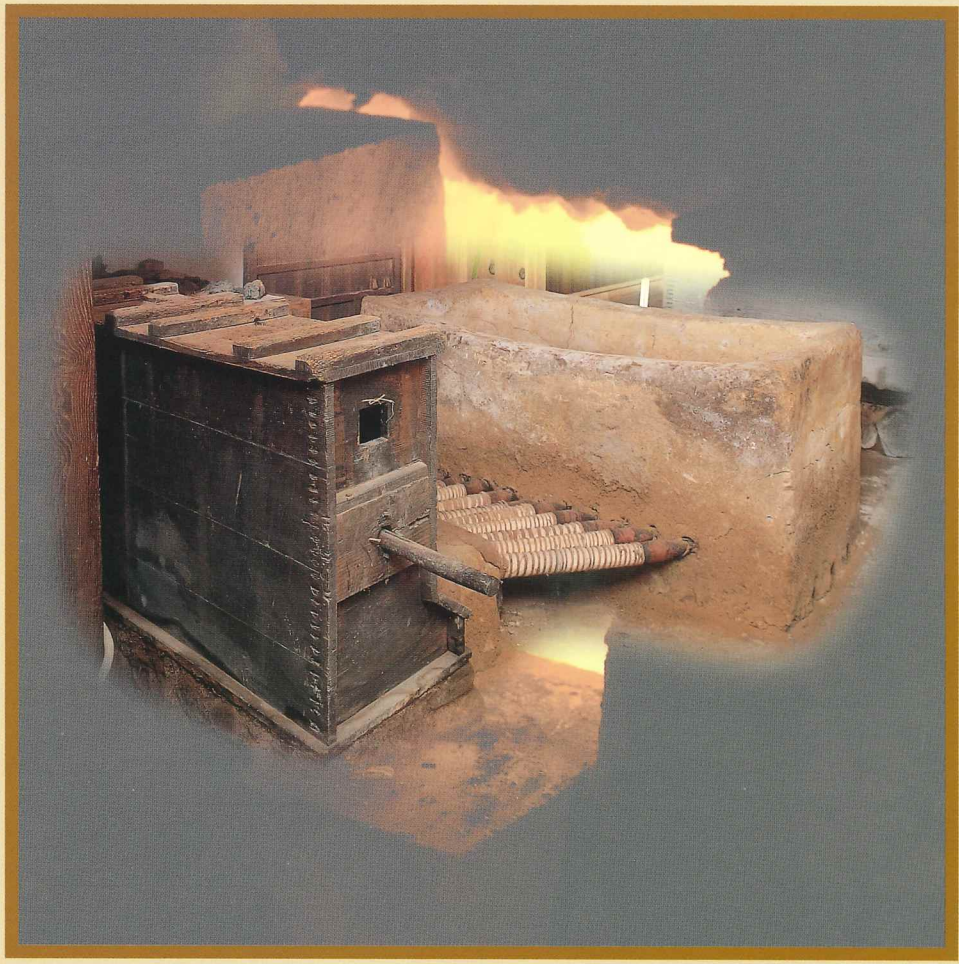
この「鞴たたら」から改良発展した「天秤鞴たたら」でしたが、明治末には「たたら製鉄」自体が消滅しました。

たたらの炉へ風を送る道具



使われた年代：江戸末期頃まで

使用した人々：たたら操業をする人々



とくちょう

たたら製鉄の用具で、たたらの炉に風を送り込みます。


なんだろう？
鉄をつくるときに風を送る道具だよ。あることばも関係があるよ。

たたら

邑南町郷土館

天秤ふいご（てんびん）

解説

中国山地で「たたら吹き製鉄（せいてつ）」が盛んだった江戸時代後期に使用された、製鉄炉（せいてつろ）内に風を送る「天秤ふいご」と呼ばれる道具です。たたら吹き製鉄は、三昼夜（さんちゅうや）、または四昼夜不眠不休（ふみんふきゅう）で操業（そうぎょう）する大変きつい仕事でした。「番子（ばんこ）」とよばれる職人が天秤ふいごに上がり、一人ないしは二人で交替（こうたい）しながらふいごを踏みました。交替することを「代わりばんこ」といいますが、その語源（ごげん）は天秤ふいごの番子さんから来ていると言われています。

うつりかわり

現在の姿

たたら製鉄は砂鉄（さてつ）と木炭（もくたん）を原料とする日本で発明された製鉄法です。日本で製鉄が始まった時代は、発掘調査などにより古墳時代後期（約1400～1500年前）までさかのぼることができます。この長い製鉄の歴史の中で改良（かいりょう）を重（かさ）ね、17世紀後半に「天秤ふいご」が発明され、鉄の生産量は飛躍的（ひやくてき）に増えましたが、明治以降西洋の製鉄方法が導入（どうにゅう）され、たたら吹き製鉄も衰退（すいたい）していきました。

たたら吹き製鉄に使用する送風装置



使われた年代：江戸時代後期まで

使用した人々：製鉄技術者

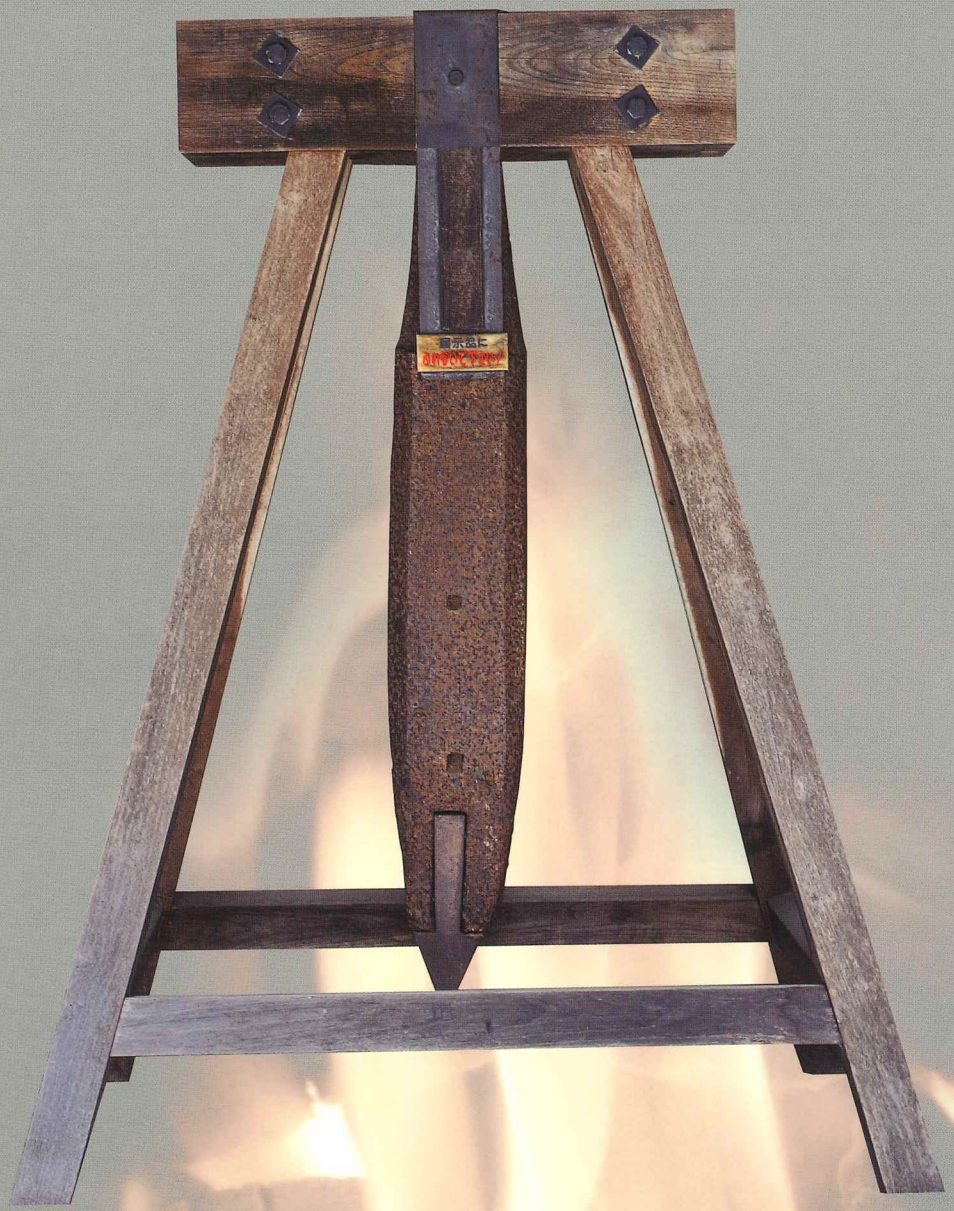


とくちょう

製鉄に使用した道具で、この上に人が上がりシーソーのように左右に踏み込みました。

なんだろう？

重さが500kg以上あり、先端はとがっているよ！



たたら

財団法人絲原記念館

大鋼（おおどう）

解説

たたら操業（そうぎょう）でできた鉧（けら）とよばれる畳一畳大の鉄塊を小さく割る道具です。全長約136cm・重量約650kgあります。大鋼場とよばれる工場の角塔の上に、江戸時代は人力で、明治時代以降は水力で引き上げ、下部に置いた鉧の上に落下させてこれを破砕（はさい）し、次の工程に送りました。先端部は、鈍化（どんか）するので、取り替えて使用しました。これが考え出される以前は、鉧を割る方法がなく、鉧は放置されたままでしたが、これを使うことで鉧中の良質な鋼（はがね）を取り出すことができるようになり、たたら師の利益は増大しました。

うつりかわり

現在の姿

奥出雲の製鉄師絲原（いとはら）家の工場で明治時代に使用されていたもので、現在は絲原記念館に展示されています。大鋼の他に、鉄塊をもっと小さく砕く中鋼・小鋼もありました。

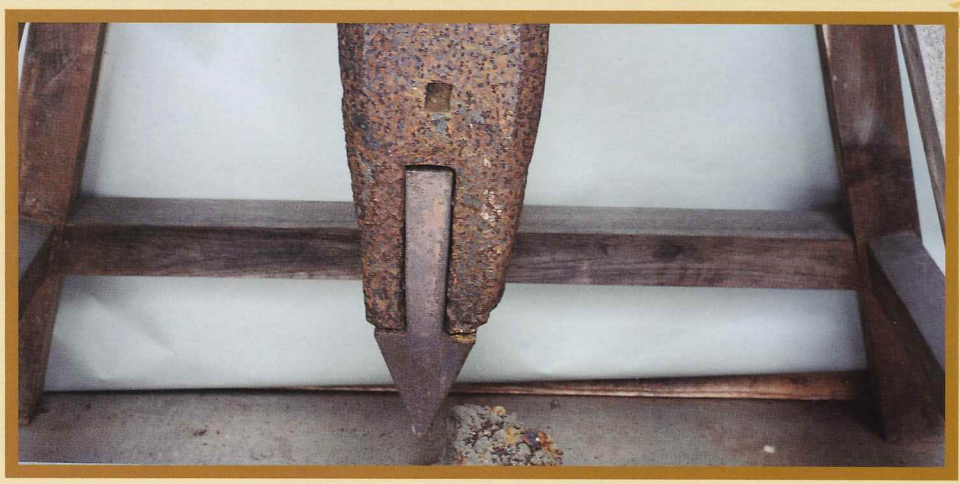
たたら製鉄で出来た鉄塊を割る道具



使われた年代：1770～1910（江戸時代中期～大正時代まで）

使用した人々：たたら製鉄工場





とくちょう

重量のある鉄刃状のものを引き上げ、落下させて使用します。